

# 振る舞いの使い分けを可能とする ソーシャルネットワークモデルの提案

政策・メディア研究科 修士課程2年

仲山 昌宏

# 背景

## 1. オンライン上での活動

- 自分を「識別子」として表現
  - メールアドレス
  - ウェブサイトのURL
  - UNIX ユーザID
- 全ての行動が、識別子に結びつけられている。
  - つまり、人間を識別子として抽象化
  - インターネット利用者のほとんどが識別子を持つ
  - 状況ごとの複数の識別子を持つ人もいる

# 背景

## 2. 人間関係の抽象化

- 人間を表現した識別子
  - 次は人間どうしの関係も表現できないだろうか
- SNS(ソーシャルネットワーキングサイト)の登場
  - 知人関係を「識別子間のリンク」として電子化
  - 「距離」に基づく情報アクセス制御
  - 知人を明示することで信頼を担保・交流を支援

# 問題意識

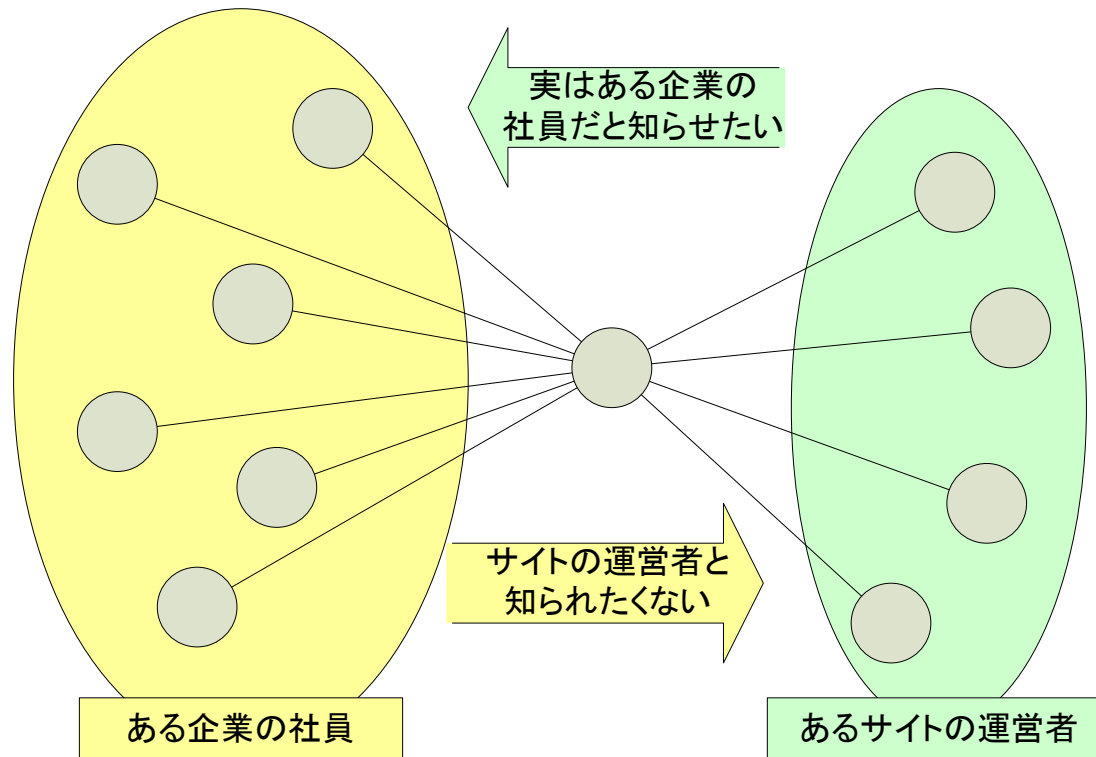
- 抽象化による文脈の喪失
  - 様々な知人関係の形態
  - 相手や状況に応じた「自分」の変化
- 本来、相手ごとに自分の文脈を持つ
  - 現状は、「ある情報を見せる・見せない」
  - 「違う見せ方をしたい」という場合

# 問題の考察

- 自分が持つ文脈
  - 相手ごとの振る舞いの違い
  - 複数の「**ペルソナ(仮面)**」と定義
- ペルソナ同士の関係
  - 相手によって違う自分を見せている
  - 「**違う自分の存在**」を一部の知人には見せたい

# 問題になる場合の例

- ある社員が自社の製品に関するサイトを運営
  - 会社の人には知られたくない
  - 親しい人に実は社員と知らせることで信頼させたい



# 目的

- 複数のペルソナの使い分けを実現
  - 相手ごとに違う自分を見せる
- ペルソナどうしの開示関係を実現
  - 違う自分の存在を限定的に開示する

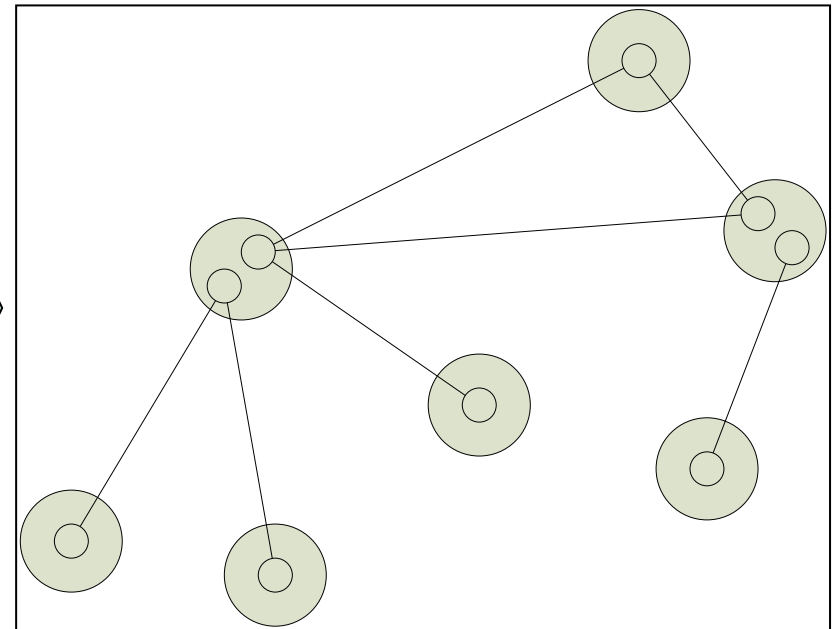
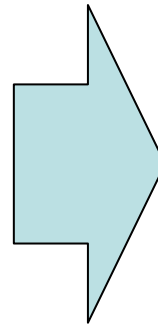
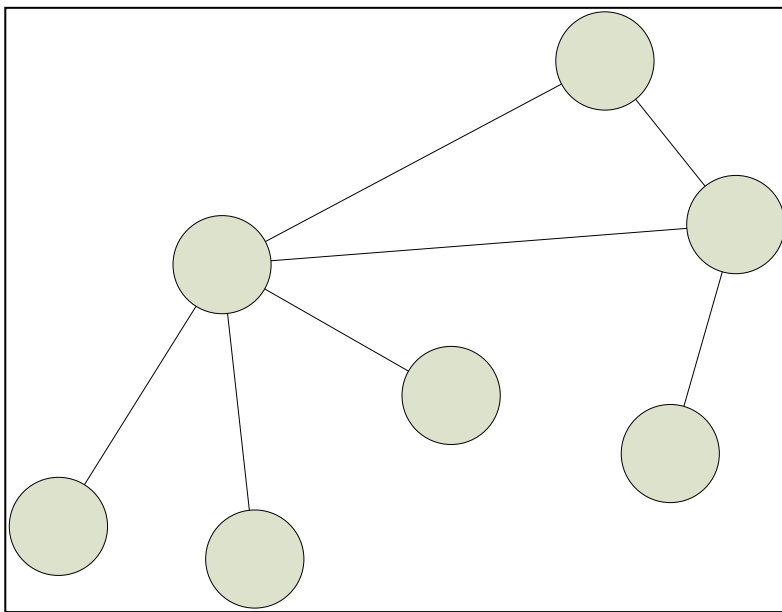
# ペルソナの抽象化

- 最終的には相手の数だけ存在
  - 知人リンクごとの属性として表現(高コスト)
- 複数の相手に対して、似たような文脈を共有
  - 「似た文脈」を一つのペルソナとして集約
  - ペルソナごとに一つの識別子を割り当て



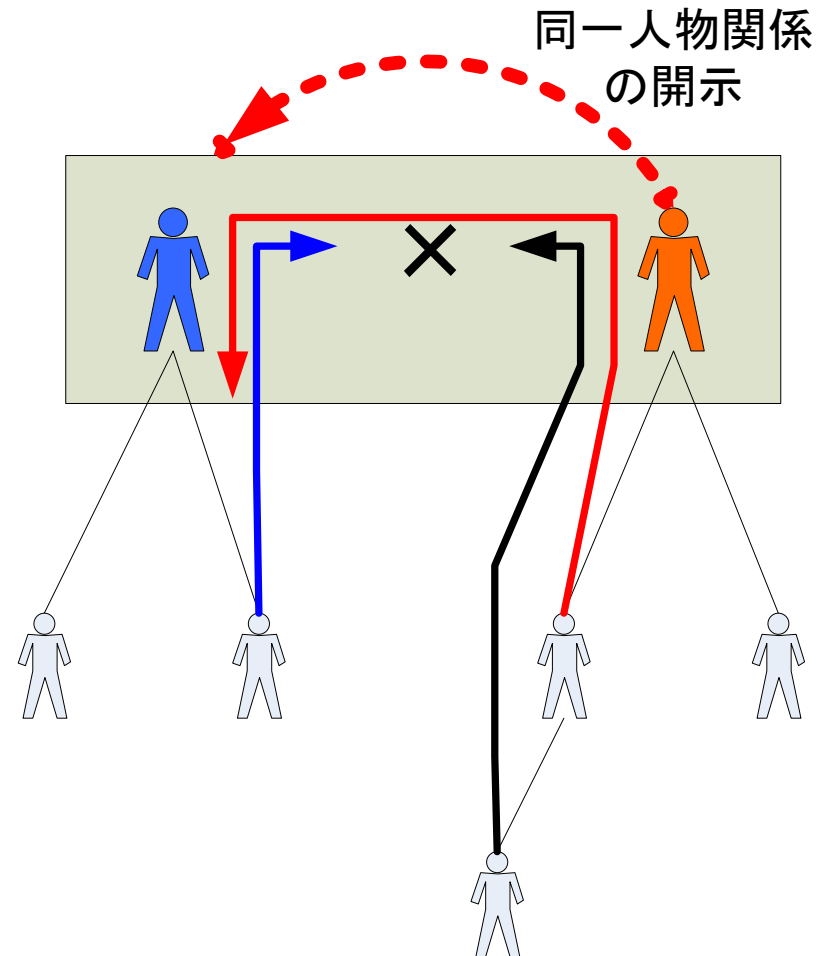
# 本研究のモデル(1)

- 識別子を単位とした知人ネットワーク
  - 利用者は複数の識別子を使い分けて行動する
  - 識別子ごとに別の属性・知人関係を持つ



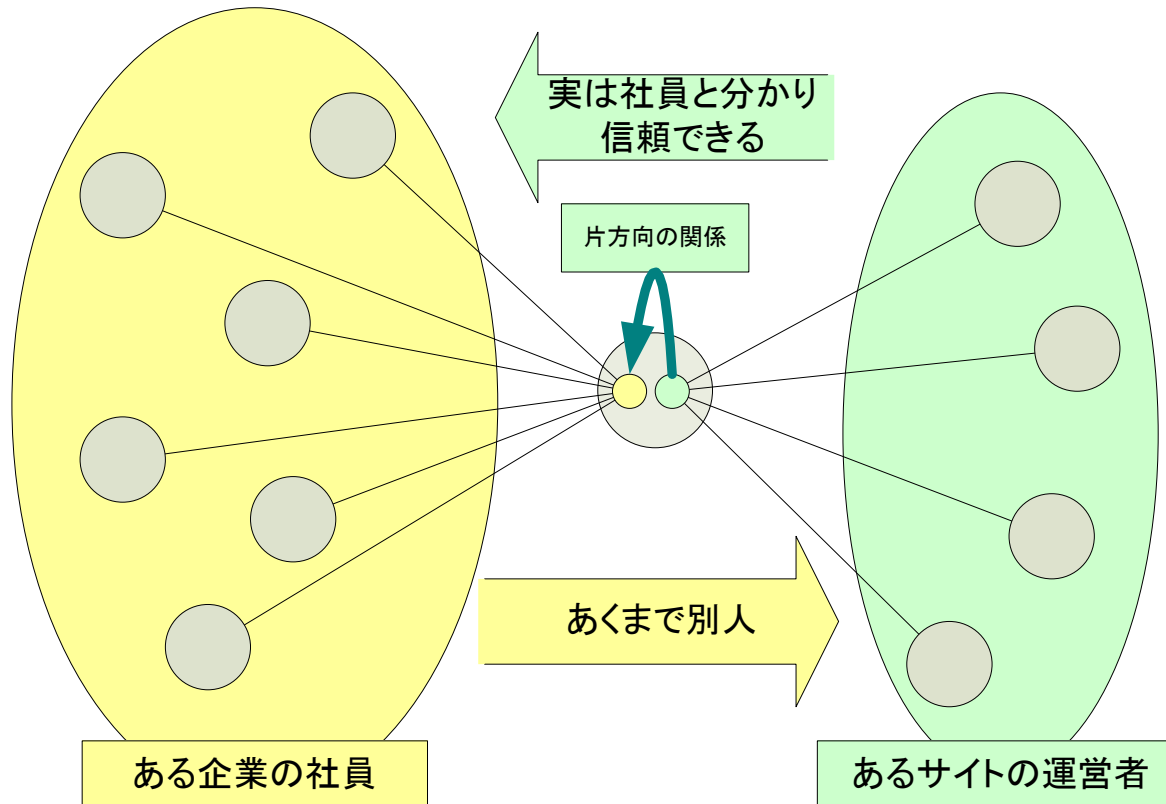
# 本研究のモデル(2)

- 「識別子」同士の関係
  - 「実は同一人物である」ことを一部にだけ開示
  - 知人ネットワーク上の特殊なリンクとして表現
- SNSモデルの拡張
  - 片方向
  - リンクの可視範囲



# 本モデルによる解決

- 相手ごとに複数の識別子が存在
- 同一人物関係の開示による信頼性の担保



# 実証実験

- Web上のサービスとして実装
  - 本モデルの知人ネットワークを基盤とする。
  - 公開サービスとして利用者を集める。
  - 付加機能は既存SNSを参考にする。

# 評価方針

- 利用状況の分析(定量評価)
  - 各登録者がどれだけ別の識別子を持ったか
  - 識別子同士の開示関係がどれだけ利用されたか
- アンケート(定性評価)
  - 複数のペルソナを使い分けられるようになったことで、コミュニケーションが促進されたかどうか

# まとめ

- ペルソナの使い分けを抽象化
  - 識別子の使い分け
  - 同一人物であることの開示
- 実験・評価
  - 実装を実証実験のために広く公開